

こもりぬ 「隠沼」の奥ゆかしさ

太宰治の小説『津軽』に「隠沼」の一節があります。旧制弘前高等学校時代、太宰が「まちのはづれ」だと思っていた弘前城を訪れた時、脚下に「夢の町」がひっそりと存在していることに気づき、その感慨を記したものです。

「お城のすぐ下に、私のいままで見た事もない古雅な町が、何百年も昔のままの姿で小さい軒を並べ、息をひそめてひっそりうずくまつてゐたのだ。ああ、こんなところにも町があつた。年少の私は夢を見るやうな気持で思はず深い溜息こもりぬをもらしたのである。万葉集などによく出て来る『隠沼』といふやうな感じである。私は、なぜだか、その時、弘前を、津軽を、理解したやうな気がした。」

安藤宏氏（東京大学教授）は、この後に続く「弘前城はこの隠沼を持つてゐるから稀代の名城なのだ」という太宰の記述について、「こうしたおうような構えにこそ、異なる文化を包摂していく奥行きこもりぬの深さがひそんでいるのにちがいない」と「奥ゆかしさ」の語をもって「弘前」の特質を表現し、「太宰文学」の特質もそこにあると指摘しておられます（『太宰治生誕110年記念展』図録、傍線欄引）。このたびの企画展の1年は、「『隠沼』の奥ゆかしさ」を後世へと引き継ぐ大切な1年だと考えています。

（企画研究専門官 櫛引洋一）

《新収蔵資料紹介》

昭和の名編集長 加藤謙一の色紙

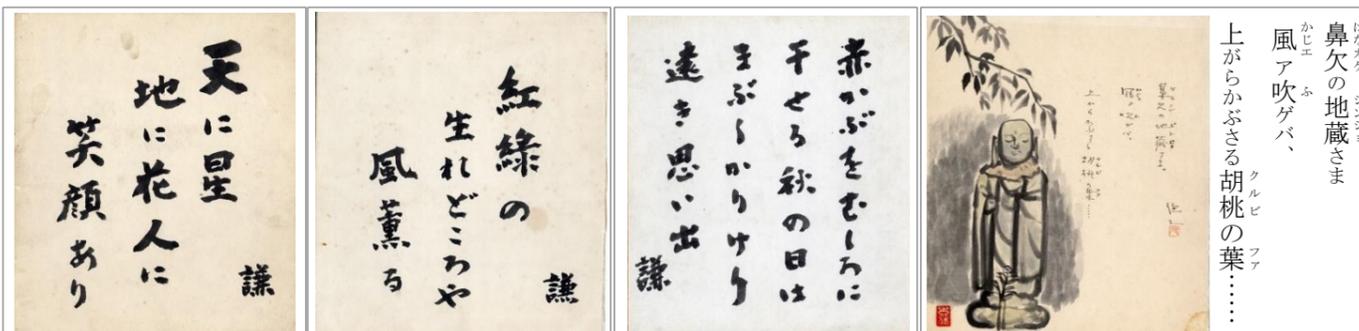
3枚の色紙は、弘前市りんご公園の旧小山内家住宅ゆかりの品です。昭和35年、弘前市郊外・高杉の小山内家で、加藤謙一の四男・丈夫氏（現・国立公文書館館長）が、大学生活の最後の夏を過ごしました。

その後、小山内宅は解体されましたが、りんご公園内に復元され、「旧小山内家住宅」として公開されています（弘前市指定有形文化財）。3枚の色紙は、昨年夏まで小山内家に所蔵されていました。

一戸謙三色紙

今年生誕120年を迎える詩人・一戸謙三に関する資料も新たに寄贈されました。

色紙は、一戸謙三の津軽方言詩「地蔵さま」。
（一戸謙三書、黒瀧大休画）



文学館カウンターにて販売中です。

弘前市立郷土文学館 「太宰治生誕110年記念展 第43回企画展」 図録

「私は、この弘前の城下に三年あつたのである。」
（『津軽』より）

¥ 800



撮影用二重廻し（マント）

文学館で来館記念撮影
開催中の太宰治展に合わせて、記念撮影用の二重廻し（マント）をご用意いたしました。マントを着て撮影出来ます。来館記念にいかがでしょうか。



北の文脈ニュース 第80号

Kitano bunmvaku news

第43回企画展

太宰治 生誕110年記念展 —太宰治と弘前—

太宰治（1909～1948）は、明治42年に旧金木村（現 五所川原市）に県下屈指の大地主の六男として生まれました。「罪、誕生の時刻に在り」（『二十世紀旗手』）との意識を自らの宿命として刻印し、生の不安と苦悩にさいなまれ、破滅的な生活の中から「斜陽」「人間失格」などの名作を生み出しました。その作品は「永遠の青春の書」として今なお多くの人に読み継がれています。

本展は、全国屈指の人気作家・太宰治の生誕110年という節目の年にあたり、太宰治が官立弘前高等学校の学生として生活した「弘前」と生誕地・金木をはじめとする「津軽」をテーマの中心に据え、貴重な資料により、太宰治の人と作品、太宰を育んだ風土について理解を深めていただくものです。太宰の幼少期からの資料や写真、大人になり作家の道に進んでから、他の文人との交流がわかる書簡など約150点を展示しております（展示替を含む）。

本県初公開の太宰愛用の電気スタンドは、藤田家に下宿の際に生家の津島家から持ち込まれ、卒業時に藤田家長男・本太郎氏に譲られたとされています。また、太宰の現在確認されている最も古いとされている手紙には、夏休みに下宿先から生家に戻った太宰の寂しい心情が綴られています。太宰が敬愛した三兄・圭治作の仏像や初版本39冊も展示しており、特に初版本の展示は装丁もきれいで見応えがあります。

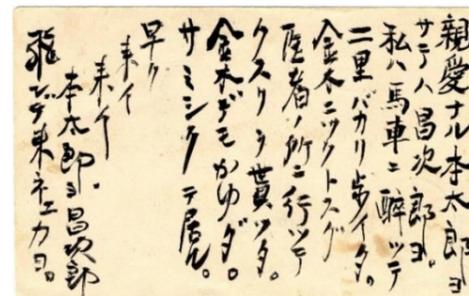
当館ならではの、太宰と「弘前」との関係、青年太宰の素顔をご覧ください。

また、芦野公園をはじめとする県内各地の文学碑、記念碑を紹介しています。太宰に思いを馳せながら碑めぐりをしてみてはいかがでしょうか。さらに、この企画展のために、安藤宏氏（東京大学教授）の「こもりぬの記憶」、三浦雅士氏（文芸評論家）の「死の誘惑」を寄稿いただきました。8月には安藤宏氏を講師に迎えた記念講演会も予定しております。皆様のご来館をお待ちしております。

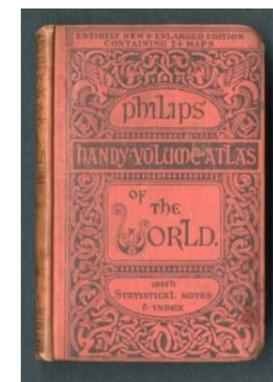
本県初公開



太宰治愛用の電気スタンド
太宰治が、弘前の下宿先・藤田家で使用していたもの。（笠の部分は復元）
三鷹市スポーツと文化財団蔵



太宰治はがき
（昭和2年7月8日、藤田本太郎・昌次郎宛）
現在確認されている、太宰治の最も古い手紙。
個人蔵



官立弘前高等学校時代の世界地図帳
青森県近代文学館蔵

スポット企画展 「長部日出雄追悼展 — 津軽をこよなく愛した岩木山の子 — 」

平成30年12月1日～平成31年1月30日

平成30年10月18日、弘前市出身の直木賞作家・長部日出雄が84歳で亡くなりました。長部は昭和9年、同市土手町に生まれ、雑誌記者などを経て作家の道を歩みます。昭和48年には「津軽世去れ節」「津軽じょんから節」で第69回直木賞を受賞。その後も芸術選奨文部大臣賞、大佛次郎賞、和辻哲郎文化賞を受賞し、文学にとどまらず、映画、宗教、社会科学など広範囲におよぶ世界を書き続けました。

本展では、著作や原稿、色紙などの資料約40点を展示し、津軽をこよなく愛した長部日出雄の業績をダイジェストで振り返りました。中でも注目を集めたのが、初公開となった直筆サイン入りのレースハンカチです。このハンカチは長部が幼なじみの女性に宛てたもので、サインとともに「何度も初恋をした町にて」というメッセージが書かれています。また、展示室の壁には長部の初版本一覧を印刷して展示しており、訪れた人たちは、長部の津軽に対する賛美の思いや業績の数々をじっくり観覧していました。

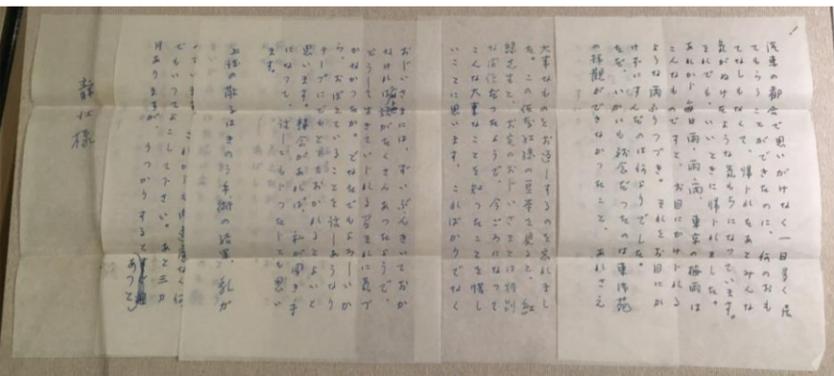


スポット企画展 「新収蔵資料展」 開催中

平成31年2月1日～平成31年3月31日（最終日は午前みの展示）

昨年12月28日で終了した第42回企画展「名編集長・加藤謙一」、および前スポット企画展「長部日出雄追悼展」の開催期間中、来館者や関係者の方々からの新たな資料の提供が相次ぎました。また、今年生誕120年を迎える詩人・一戸謙三に関わる資料も新たに寄贈されました。

展示資料のうちの1つ、加藤謙一書簡・竹内静江宛（昭和45年6月16日）では、緑の笛豆本（第25集三浦次磨『佐藤紅緑の系譜』・昭和45年3月1日刊）を見た謙一の感想が綴られています。豆本には佐藤紅緑から竹内兼七（竹内静江氏祖父）に宛てた書簡（大正12年）が掲載されており、紅緑と兼七が懇意にしていたことが伺えます。謙一は「今ごろになってこんな大事なことを知ったことを惜しいに思います。（中略）おじいさまには、ずいぶんきいておかなければならぬ話がたくさんあったようで、どうして生きていられる間それに気づかなかったか」と書き、機会があれば謙一自身が兼七に関する話の聞き手になりたいとも書いています。兼七は弘前市屈指の富商の息子で、幸徳秋水、堺利彦らとともに『平民新聞』の創刊に参画、明治期末には「無為舎」として俳句活動も行っていましたが、謙一は兼七が亡くなるまで『平民新聞』との関わりを知りませんでした。



加藤謙一書簡・竹内静江宛（昭和45年6月16日）
個人蔵

このほか、本展では、加藤謙一色紙、詩額「弘前」（一戸謙三書、黒瀧大休画）、写真「長部日出雄出版記念会で乾杯の音頭をとる高木恭造」など、新収蔵資料を中心とした24点を紹介しています。

《北の文脈文学講座》



- 9/15 (土) 佐藤紅緑と加藤謙一の出会い
講師 斎藤三千政（郷土文学研究家）
- 10/20 (土) 朗読会『津軽の詩』より
講師 「語る会」（下川原久恭他）
- 11/17 (土) 大佛次郎「鞍馬天狗」と加藤謙一
講師 榎引洋一（企画研究専門官）
- 12/15 (土) 新収蔵資料展
講師 榎引洋一（企画研究専門官）

《ラウンジのひととき》



- 10/6 (土) ふるさとと私の詩
藤田晴央、自作を語る～朗読と講話
出演 藤田晴央、ギター渋谷聡
- 11/3 (土) 三好達治賞受賞作詩集『夕顔』の世界
藤田晴央、自作を語る～朗読と講話
出演 藤田晴央、ギター渋谷聡
- 12/1 (土) マンドリン&ギターコンサート
出演 古川里美、今井正治

《2019年度のご案内》

5月から12月までの各月、文学館2階ラウンジにて開催いたします。

《北の文脈文学講座》
第3土曜日午後2～3時
(8月17日(土)の企画展記念講演会は図書館視聴覚室)

《ラウンジのひととき》
第1土曜日午後2～3時
新年度も朗読会、コンサートなど様々な催しを予定しており、どなたでもお楽しみ頂ける内容となっております。

《郷土文学館 “初の試み、特集”》

特集Ⅰ

《無料上映会》（終了しました）

鞍馬天狗
「角兵衛獅子」(1951年)

平成30年10月14日、郷土文学館待望の無料上映会が行われました。スポット企画展「鞍馬天狗」の大佛次郎と加藤謙一に合わせ、大佛次郎原作の「角兵衛獅子」（加藤謙一編集の『少年倶楽部』に連載）が上映されました。当日は多数のご参加とご好評を頂きました。次回への期待も多く、新年度は秋頃の上映を目指しております。

《上映会参加者の声》

- ・古い白黒映画がなつかしい。美空ひばりの歌、嵐寛のなつかしさに再度鑑賞したくなりました。
- ・昔懐かしいこんな企画を続けてほしい。

特集Ⅲ

《ロビー展ミニミニコーナー》

《弘前の魅力紹介》

弘前出身の作家やゆかりの作家が愛した場所や文学碑を地図上に書き、来館者には各自のお気に入りの「弘前」を書き加えて頂くコーナーを設置しました。

太宰治や石坂洋次郎、阿部合成などが通ったとされている「土手の珈琲屋万茶亭」、藤田記念庭園内の「大正浪漫喫茶室」など「弘前の顔」が紹介されていました。



特集Ⅱ

《郷土文学館限定オリジナル クリアファイルの販売開始》

平成30年9月から、郷土文学館限定「クリアファイル」の販売を開始しました。デザインに使用したのは、一戸謙三の方言詩「弘前」を版画家の工藤哲彦氏が作品にしたものです。

1枚200円（税込）というお求めやすい価格もあって大変好評です。

詩画：「弘前」の
クリアファイル→



《文学館豆知識》

展示室に展示されている内容とはまた一味違った切り口で紹介されていた〈豆知識〉コーナー。次回も乞うご期待！

